

〔2000年立命館大学産業社会学部シンポジウム〕**「21世紀の福祉社会建設とマンパワー形成の課題」**

このシンポジウムは、立命館大学産業社会学部に新学科、人間福祉学科を創設準備する一環として、2000年12月2日に国立京都国際会館において開催された。シンポジストとしてお願いしたのは次の4名の方々である。

生田 正幸氏（龍谷大学）

芝田 英昭氏（立命館大学）

廣末 利弥氏（老人福祉総合施設原谷こぶしの里代表 立命館大学非常勤講師）

桐野由美子氏（京都ノートルダム女子大学）

これらの方々には本誌への掲載を前提としてご参加いただき、シンポジウム終了後、それぞれの問題提起について独立した報告として加筆修正、もしくは新たに書き下ろしていただいた。

なお、シンポジウム企画確定後、立命館大学産業社会学部4回生の大濱徹氏が希望を申し出たため、積極性を多として特別報告者として位置づけることとした。

シンポジウムのコーディネートは立命館大学産業社会学部加藤直樹が行い、当日の進行と本誌掲載への最終調整を行った。

加藤 「21世紀の福祉社会建設とマンパワー形成の課題」をテーマに、お集まりいただきました皆さま方、シンポジストの先生方ありがとうございます。もうすぐ21世紀となりますが、20世紀はどういう世紀であったか。2回にわたる世界戦争で空前とも言える人の命が奪われ、財産が奪われることが起こりました。科学技術が飛躍的に発展を遂げて生産も飛躍的に増えたわけではありますが、にもかかわらず、その分配は全体に行き渡るのではなく、未だに小さな子どもたちが毎日餓死していくようなことも一方でございます。生産力が上がったのはいいが、そのプロセスで自然環境が破壊され、地球規模の環境問題が大きな問題になっています。そのような中で、21世紀は20世紀にもたらされた否定的なものを超えてすべての人間が共存、共栄できる、自然環境も含めて人類が共生していける社会をつくっていかなければならないという声が大きくなっています。そのような社会はある意味では福祉社会と呼んでいいのではないかと思います。

一方、20世紀は人権の世紀とも言われます。一面では今のような戦争で人権が根こそぎ否定される事態が起こりました。しかし大局的に見れば、この100年間、子ども、高齢者、女性、障害者等の人権への意識は大きく前進をしてきました。そして21世紀はすべての人々が自己実現を図っていくことができる社会になりうるのではないかと、なっていかなければならないのではないかと

ています。そのような点からも福祉社会の建設は必要だと言われ、また可能性があると言えるところに来ているのではないかと思います。

そのような状況を踏まえて、立命館大学産業社会学部では来年4月、新しい学科として人間福祉学科を創設することで、今、設置申請をしているところでございます。今回のシンポジウムはこの新学科の設立に向けての一つの機会として設けられたものです。福祉社会を建設していく上で何が必要であるか。その社会の建設に不可欠である担い手をつくっていく上でどのような課題があるかを明らかにすることを目標として、このシンポジウムを企画しました。本日は4人のシンポジストの先生方をお願いをしました。龍谷大学の生田正幸先生には福祉情報論という新しい分野の立場から福祉社会に向けての課題をお話いただきたいと思います。立命館大学の芝田英昭先生には社会保障論の立場から福祉社会での課題についてお話をいただきます。次に社会福祉法人七野会の廣末利弥先生は高齢者福祉の現場におられ、福祉社会を担う担い手づくりについて現場の立場からお話をいただきます。最後に京都ノートルダム女子大学の桐野由美子先生には福祉社会の担い手づくりの課題として大学の社会福祉教育の立場からお話をいただきます。

なお、特別報告者として立命館大学産業社会学部4回生の大濱徹さんに福祉の人材育成に関わる問題提起を話していただきます。本日の進行役は立命館大学産業社会学部の加藤直樹です。よろしくお願いいたします。

最初にシンポジストの方々、特別報告者の問題提起をしていただき、質疑討論をいたしたいと思っています。シンポジスト、フロア区別なく一緒に討論をしていきたいと思っています。積極的なご発言をいただきたいと思います。